

浄土

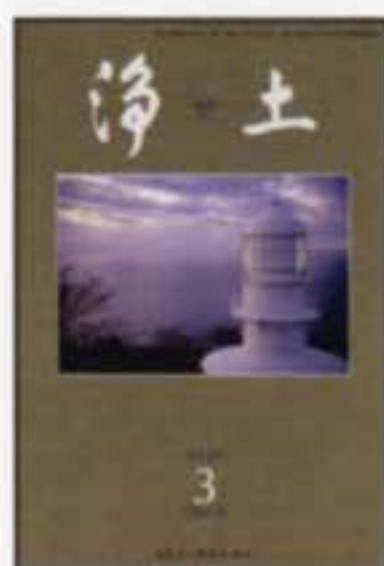
monthly JODO

6

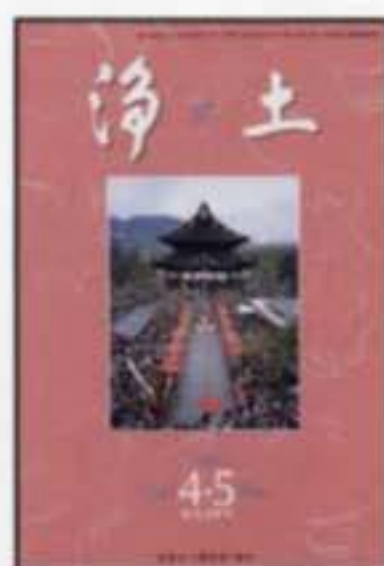
June 2005



02/9/12 大阪通町筋
近々帽子屋さん



平成9年3月号



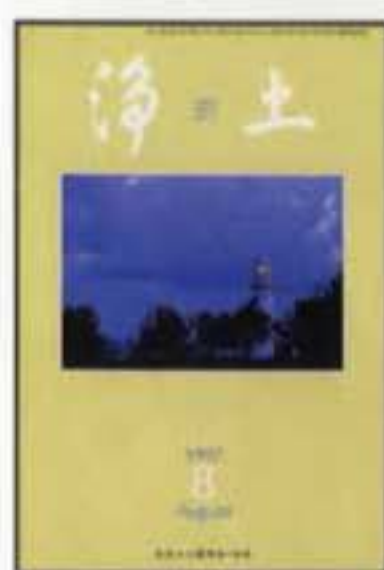
平成9年4・5月号



平成9年6月号



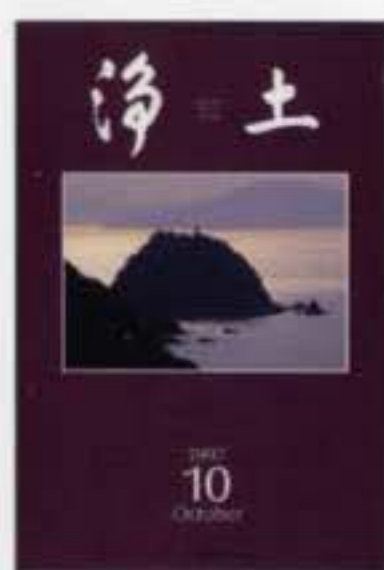
平成9年7月号



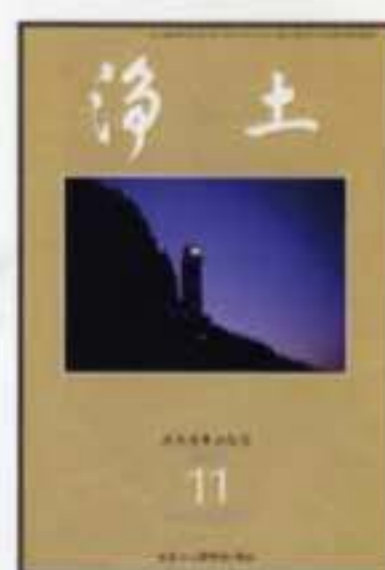
平成9年8月号



平成9年9月号



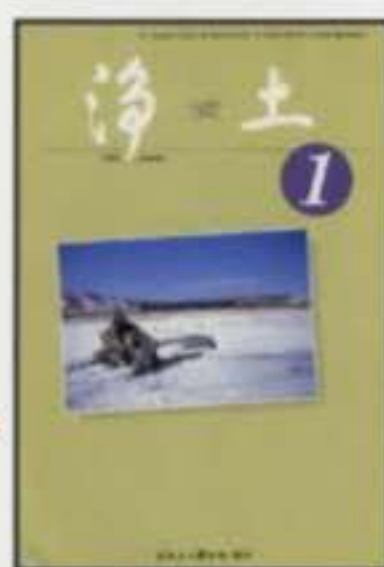
平成9年10月号



平成9年11月号



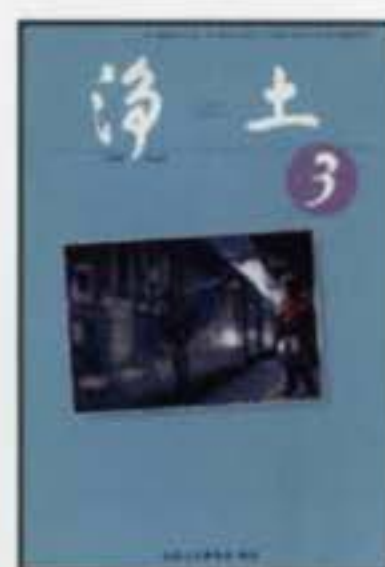
平成9年12月号



平成10年1月号



平成10年2月号



平成10年3月号



平成10年4月号



平成10年5・6月号



平成10年7月号



平成10年8月号

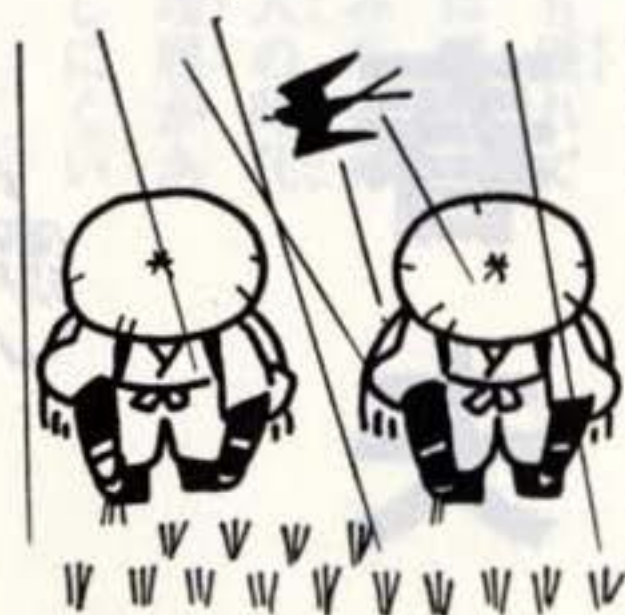
浄土

2005/6月号 目次

ライブラリー浄土

法然上人の女性観	佐藤春夫	2
熊野古道に行く 第五回	森 清鑑	10
日本人と梵鐘の音	真野龍海	20
会いたい人 中村富十郎さん②	関 容子	28
表紙の言葉 陽だまりの街	村上 健	35
響流十方	小村正孝	36
日本酒のことば 日本酒のじかん	藤原理加	40
コラム	大室了皓	41
Jフォーラム		43
浄土誌上句会		44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙題字=浄土門主 中村康隆猯下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



ライフラリー浄土

昭和10年8月号より

法然上人の 女性観

佐藤春夫



女性観と申しますと、何やら大へん難しいようでございますが、そう沢山に種類もございませぬ。大ざっぱに分けて見ますと、男尊女卑、つまり男子の方が女子よりも優れているという考え方とそれの逆。それにもう一つ男子も女子も同じ人間である以上は区別すべきものでないとか、大別して先ずこの三つに片づくかと存じます。これらは、みなその時代の社会情勢の支配を受けてそれぞれの傾向に落ちつくわけで、また思想家個人の時代を見る角度もそれぞれに変わって参ります。それ故三つの考え方それぞれに相当の理屈があつて甚だ自然に尤もに出来ているもののようにで一口にその何れを是とも非とも申しにくいわけ合ひのものです。

由來、東洋は所謂五障三従とやら、男尊女卑の傾向が多いように思われます。

それで法然上人の女性観を考えるに先立つて、私の無学では力及びそうにもありませんけれども、広く仏教の女性観というものを考えるのが当然の順序であらうかと存じます。それで男女どころか人間も禽獸も一切平等の仏教精神によりますと、女性必ずしも男子より劣つたように決めてしまふ道理はありませんし、事実法華經の御說法の中には、八歳の龍女が即身成仏を遂げているような実例もございますし、又御承知の通り觀經の御說法の場合には特に韋提希夫人をお相手にお説き遊ばされたのみか三百の侍女が同じく成仏をして居られるのでございますから、お釈迦さまの目にはただ一つ仏性の有無だけが問題でその他の点毫も男子と変つた者として女子を遇されなかつた例は決して乏しくないのであります。つまり今申上げました一面では仏性があるという資格をもつたものは皆男子である

という見方平等の意見を發表していますけれども別の一面では女性というものは男子よりも一段と知力も意力も薄弱で劣つたものであるという風な考え方もあるようでございます。それで何かというと、「外面は菩薩の五徳、内面は夜叉の如し」というようなこともいつて、婦人を軽んじている傾向も確かに見えて居ります。しかしお釈迦さまが婦人を軽んじているのではない。私の考え方ではやはり一つの方便であろうかと存じます。で、婦人の誘惑され易い一事がお釈迦さまの頭にあるからして、丁度、父母が子供に対して五月蠅ほどいろんなことを言つて聞かせる如く生理的に社会的に、とかく不利の立場にあると思うからして、これを励まし注意するための方便として、大慈大悲のお心から女人は男子より劣つたものであるかの如く説いてその自覚を促しているものであらうと存じます。何れにしても、兎に角、大悪魔王の如く婦人を見る見方は確かに仏教の一面にあるようでございます。一見矛盾のようであるが、一つは平等の側から、一つは差別の側から、つまり、理想として、現実の立場からとの相違で仮りにこう違つて来てるものでしょう。それで法然上人当時の仏教界は、今申した仏教の見地の、二つの女性観のどちらが多く現われて居りましたろうか。平等の面を見ないで、差別の面に立脚して、女性を男子よりも軽んずる傾向があつたのではないかと思われまゝ。聖道門の指南道場とも見るべき高野や、叡山では堅く女人を禁制しているところを見ると女人というものは、所謂三従五障の汚れあるものだという風に見て男子同様に扱つていなかったのは靈域への女人禁制の一事でも確実だと思われまゝ。

それならば当時の社会情勢は如何ようなものでありましたろうか。その当時の時代相——信仰や、貧富、貴賤、或は男女両性の対立の相、即ち一般の生活を現わした文学によってこれを窺いましょう。この時代を描いた文学で平家物語ほど勝れた文学はないのでございますが——試みに平家物語に現われた女性で千手の前にしろ、仏御前であるとか、小督局であるとか、その外平家の大将方の北の方達でも、直ぐは私共の頭に名前も出て来ないほど沢山の婦人が描かれて居りますが、気の毒な人たちばかりです。無理ありません。みんな権力に対する憧れを、武力の争闘によって解決しようと沸き返っているような、あの時代の事ですから、力というものに乏しい婦人として、丁度押合圧合の群集の中で、女子供が悲鳴を挙げていると同じわけです。例えてみれば猛獣どもの格闘している野原の花とでもいうべき有様で、どころんでも婦人にとってはまことに気の毒千万な世の有様であつたと感じさせられます。源平時代——法然上人の時代は言わば男万能の世界でした。この時代の直ぐ前の平安朝時代はどうであつたか。その時代の女権はどうであつたかと申しますと、これはまた源平時代とは打って變つて女第一の世界でした。しますると時代は唯美主義の時代とでも申しますか、風流な貴人が時代を支配していただけに、美しいものが非常に尊重された時代でございました。この時代の文学を一目のぞいてもすぐわかります。源氏物語のなかの女性と平家物語の女性とをごく大ざっぱに考えくらべて見てもです、いや男でも女のように美しくなければならぬ時代だったのでしよう。力という点では女は到底男の相手ではないが、優美という段になると、どうしてこれ

は力とは全く逆に、殆んど婦人の専有の強味のようにさえ思われるではありませんか。こんな時代ですから婦人の社会的地位は相当高いもので、さればこそ文学者等にも紫式部、清少納言はじめその他沢山のすぐれた婦人が出て居るではございませんか。

この婦人に有利な社会状態がほつぽつ動揺しはじめて、その次に現われたのは、一切合切力づくでやろうじやないかという、武家の勃興時代でありますから、もう優美も何もない。この時代になると喧嘩腕づくではとても婦人は男子の敵でないので、婦人の社会的地位が大変不幸な状態に立ち至つて居ります。きのうの仕合せ者が、不意にこんな時代に出くわしたのですから、その不幸は一しお大きいわけです。当時の仏教界がこの現象を無視して婦人を冷遇している傾きのあつたのは、一寸考えた丈でも甚だ不合理で物足りなく考えられるのであります。

ここに法然上人が居らせられて人間の生活と時代の有様とをつくづく見て取つて居られたのに、この人間の社会の重要な半数を占めているところの婦人の不幸な生活にお氣のかぬ筈はございません。果して上人はさすがにこの事実を見て居られた。見た以上は、見えて見ぬふりをなさろう筈もない。殊に上人が最も帰依して居られた、阿弥陀さまの本願第三十五願では、女子も希望に依つては、西方の浄土で男子となつて生れ代ることが出来るようにしたいものだという願いを立てて居られるから、これを、「如来本願は特に女人に深しと見えたり」と御解釈遊ばして、つまり当時のすべての宗旨では、一般社会と同様に婦人を軽んじ冷遇していた時代に、上人は平等の一面から見て、婦人は男子同様であると

いうばかりか、更に一歩進めて社会情勢に鑑み、婦人はまことに気の毒だというので、この気兼は婦人に特典を与えて考えなければならぬということに気付いて居られたのであります。これが上人の知恵であり、慈悲でありましょう。

時代を見、人生を見ることの深さ——人生に対する理解の透徹、人生に対する同情の充溢を最もよく示す一つの好い例証かと存じます。時代の大勢に抗しているだけになおさら有難い、有意義であると考えるのであります。さればこそ、上人の婦依者の中には、名もなき市井の婦人は数え切れないから別として、当時第一流の貴婦人と思われるべき方で、上人に婦依した婦人の名が勅修御伝によって一寸考えても、十指に余る程あるように覚えて居ります。

それから御承知の『一枚起請文』を見ますと、『尼入道の無知の輩に同じうして……』という言葉がございまして尼入道の如くといつて、男の無知という事を言わず、女の無知ということを書いて、一寸考えると母性を軽んじているかの如く見えるのでございますけれども、たとえ並々ならぬ学問のある人でも、無学の女性の如くと女性と無学とを手本とせよと仰せられているのですから、この場合の無学な女性は決して侮蔑の意味を含んでおりません。侮蔑されたのは却って学者と男子とではありませんか。上人の宗教をもっとも簡単に端的に伝えた『起請文』の中に、ほんの一寸した形容の一句ではございますけれども、その一句が一見女性を卑しむが如くにして、その実は決して然にあらず。言わば差別によって女性を観る見方、平等に依つて観る見方の仏教の女性観が完全に両面を含んでい

る許りか、社会的情勢から婦人を、またその無知を特に学識ある男子以上に勞つて扱つて
いるのはまことに希有に感ぜられます。非常に簡単でございますけれども、これに依つて
上人がその他の一面に於けると同時に、その女性觀に於きましても、時代から一歩進んだ
進歩的な立場に於て、眞實を見て居られたということだけは、充分にお解りになつて頂け
たかと存じます。が然し、それではあまり簡単でございますから、蛇足でございますけれ
ども、僭越ながら私自身の考を些か申述べてさせて頂いて結論のていさいをつけましょう。
男の身びいきか、若い方は別問題として年とつた方の場合、私は男子の年とつた、つま
りお爺さんの方がなんとなく婦人のお年寄り——お婆さんより好きです。どこかに人生を永
く生きて来て、世のなかもわかつたという感じがあつて、どの階級のどういう種類のお爺
さんにも、それぞれ尊敬し、親愛を感ずることが出来ますけれども——お差障りがあるかも
知れませんが大變お申しわけもございませんが——婦人が年とつた場合にははつきり申し
にくい——あまりはつきり言うとなんですが、お婆さんは男子の方に較べて好感が持ちにく
い。仏性の爺さんとは申しますが仏性の婆さんというのはあまり聞かない。鬼婆というの
はよく申しますが、鬼爺というのはどうもききませんね。若い婦人方や若い奥様方でも、
やがて間違ひなく、今にお婆さんになるというお考えが必要でありましょう。果してその
ご用意がおりかどうか、少々疑わしいのでございます。それについて私も一つ考えて見
まするに、多くの男子は年をとつても、そう不愉快にならないのに、婦人が年をとつて不
愉快になるのは、一たいどういう訳でございましょうか。もしや今日社会の組立が婦人に

とって、不利益ふりえきのように出来てできいるためではありませんまいか。一般いっぱんに婦人ふじんが男子だんし以上に苦くるしいところを我慢がまんしたり、無理むりをして通とおつて来こられたから、その無理むりと我慢がまんとのなみなみならぬ、男子だんし以上の苦勞くろうのおかげでそう云いう風ふうに歪ゆがんで終しまうのであって、男子だんしは年としをとつても立派りっぱだというのは、こういう見方みかたによりまして、必ずしも男子だんしの名誉めいよではないかも知しれません。万事ばんじ我慢わがままを通して来きたおかげで、いいお爺さんじいぶりが出来できるといっているのであつて見るとわれわれ一般男子いっぱんだんしもこの点てんは大おおいに反省はんせいしなければならぬものがあるように考かんがえられます。

(大正大学での講演より)

佐藤春夫 (さとう はるお) 明治25 (1892) 年 - 昭和39 (1964) 年

詩人・小説家。和歌山県新宮生。代表作に『指紋』『警笛』

『神々の戯れ』『更生記』などがある。

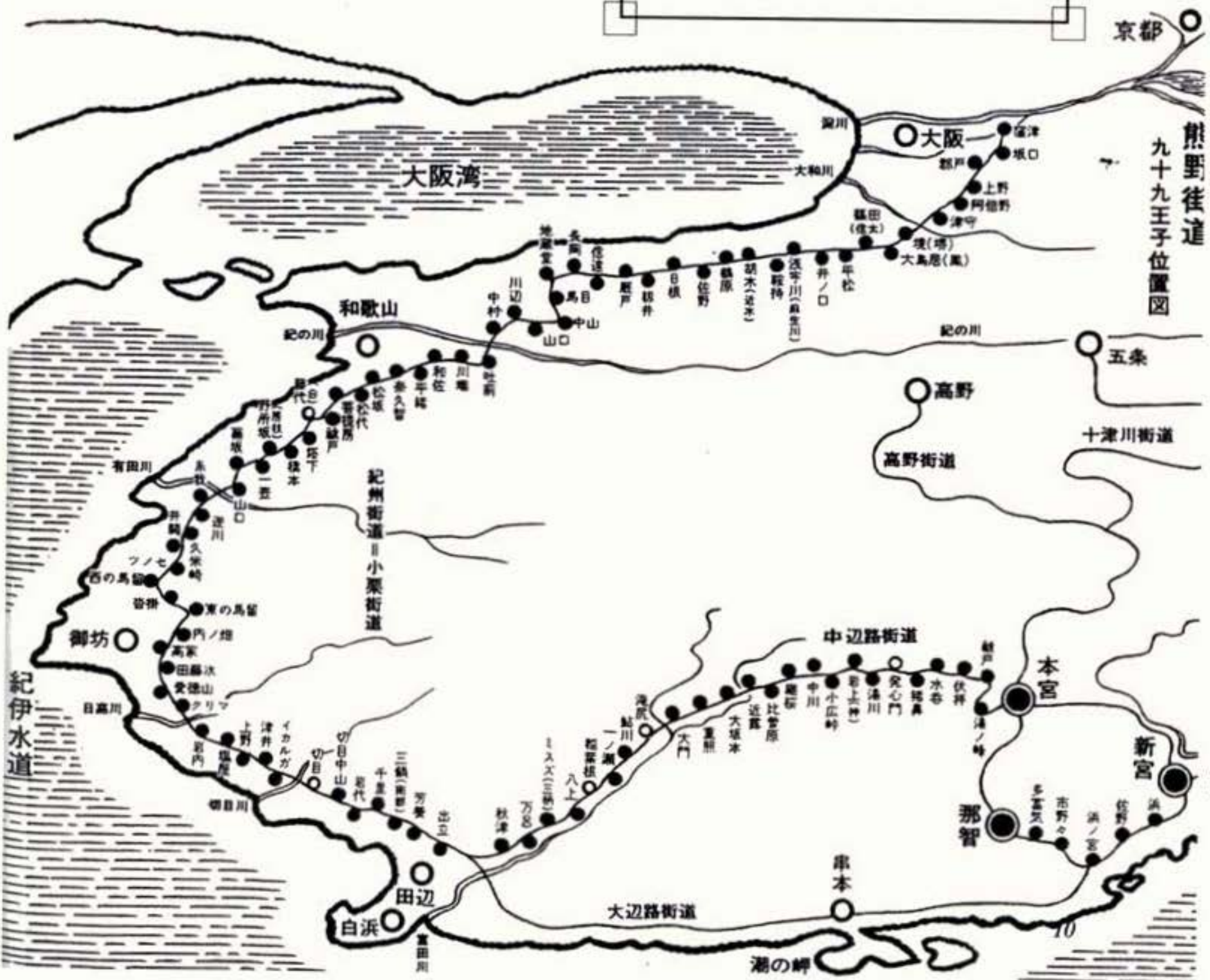
『法然上人頌』作詞もあり、

本誌には『黒谷法然上人傳』『阿弥陀さま』を連載にて執筆。

熊野古道 を行く

第五回

森清鑑



稲葉根王子から 鮎川王子へ

稲葉根王子から、岩田川（現在の富田川）の本流に出る。雨はますます強くなりびしょ濡れ状態であつたが暖かいのでこれもまた風情というもの。岩田川は大きい。昔はさらに大きく、流れも凄かつたという。そこで熊野詣の人々は、ここを「渡りの三大難所」と称した。この川には果無山脈といわれる熊野連山の奥深き大自然から集められた水が滔々と注ぎ込まれており、巡行者にとって格別の存在で、万葉古歌、定家の日記にと状況が記述されている。稲葉根王子を出立した上皇の一行は、この川を上流に向かって右岸に渡る。そして一の瀬王子に着く。それからさらに鮎川王子を目指して左岸へと渡る。このジグザグの川渡りには特別の意義があつた。平家物語にも「この川を一度渡るものは、悪行煩惱の罪障消ゆる」と記されている。人々は岩田

川の「渡り」によって罪業を清め、本宮へと向かつたのである。上皇は蓮台に乗り、家来が担ぐ。そして水浴びし、身を清める。

川を見ながら田んぼの畦道を歩くと、薄煙る雨の情景が堪^{たま}らなく良い。白鷺がすぐ傍でえさを捕っている。小山集落の山裾に一の瀬王子はある。小さな社だが、風情はある。一の瀬王子から少し歩くと住吉神社。大きな社である。ここは護良親王の家来が親王の剣を社に納め、霊を奉つたところ。護良親王すなわち大塔宮（当地では、「おおとうのみや」と呼ぶ）縁の神社である。神社は樹齢何百年を越す古木に覆われている。オガタマノキの巨木は県の天然記念物。この木はご神木である。住吉神社は、方々にあるが、通常、海の神を祭つたところという。「小川部落」の案内板があつた。ここでは部落の名が昔と変わらずに生きている。

鎌倉時代に護良親王は変装して当地に落ちのび、民家に食を求めたが、源氏の迫害を恐

れた村民は親王の願いをすげなく拒絶した。その後、護良親王の悲劇を知った村民は、自戒の念を込めて、正月にもちを食することを禁じた。現在に至るもこの風習は残っているという。再び橋を渡って鮎川王子跡あゆかわに出る。社の痕跡はない。すなわち、明治以降、住吉神社に合祀されているのだ。鮎川とは、本来「合川」を意味するそうで、ここで百聞溪谷から来る川が岩田川と合流する。昨夜来の豪雨で、岩田川は増水し、赤土色の濁流になっている。太く長い木材、ビールケースなどが流れてくる。見る間に水嵩が増しているようだ。不思議なことに、百聞溪谷からの川は青い清流なので、合流点は赤と緑の絵の具を流したような景観である。鮎川王子から熊野古道はいよいよ川に沿って上り詰めて行く。

明治以降の熊野信仰は、その熱烈さにおいて中世とは比べるべくもなく、今日の王子跡から往時を偲ぶには、まさに想像力が要求されるが、それでも嘗ての熊野信仰の雰囲気は

感じさせてくれる。ここは熊野権現様とその王子がおわすところ、海・山の神がおわすところ。人々は難行苦行の歩きは、すなわち極楽浄土への修行と信じ、自分の足と肌で体感し、神々と心を通わせ、祈り、人生のしがらみを洗い流し、清めつつ、王子社を巡り、熊野本宮に到達した。神秘に満ちた自然の中を、危険を覚悟で歩むのである。この神仏混淆信仰が実に千数百年の間、皇家から庶民に至る日本人の心の源郷であった。

滝尻王子から 本宮を目指す

鮎川王子から鮎川温泉を抜け、岩田川沿いにくねり上がって行くと清姫の墓がある。墓の傍には石碑が建っている。「煩惱の焰も消えて今ここに」。清流は上流の様子を呈してくる。そして滝尻王子に着く。滝尻王子は、五体王子の一つで最も格式が高い。王子社は岩田川と石船川いしふねの合流点にあり、人々は双方

の川で観音と薬師を念じて禊をしてから参詣した。往時はもっと広い場所に大きな伽藍や宿泊御所が建てられていたらしい。後鳥羽上皇（熊野御幸は二十八回に及ぶ）が度々歌会を開いた地でもある。ここにもナギの太木があり、鳥居をくぐると瀟洒な寺社が立っている。上皇の歌を刻んだ石碑もある。「おもひやるかものうはけのいかならむしもさえわたる山河の水（思い遣る鴨の上毛はどうであるうか。霜が冴え渡る山河の水）」。傍らにある熊野古道館では近辺から出土した焼き物や宝剣、定家の紀行文などが陳列されている。宝剣は藤原秀衡が奉納したものとされ、この神宝となっている。秀衡は妻が懐妊したお礼に熊野参詣したところ、同行の妻が滝尻で産気づき出産した。赤子連れでは詣はできないと権現様のお告げがあり、王子社の裏山にある乳岩という岩屋に赤子を残し、旅を続ける。急ぎ戻ってくると、子は狼に守られ無事育っていた。権現様の靈験に感謝した彼は滝尻に

七堂伽藍を建立したというのである。狼に育てられたという話が古代ローマ建国のロムルス伝説を想起させる。この子が三男の忠衡というのも妙な話だがこうした伝説が残されているのが熊野古道である。この物語もはるか遠方の北からも巡礼者を呼び寄せる手立てになったのかも知れない。

はるばる大阪天満橋から長い道程を歩んできた古道の旅はいよいよ核心に入る。滝尻王子の裏手にある秀衡伝説の乳岩からさらに急登が続き飯盛山を経ると尾根道になる。ここから近露王子までの古道は昔の姿を残している。いくつかの峠と王子社を越え箸折峠に着く。のどかな山道だ。森の中から時折、視界が開ける。登り詰めると牛馬童子がある。小さな石像で花山院の詣の姿を刻んだものという。やさしいがどこことなくさびしい感じがするお顔だ。花山院は若くして天皇の地位を奪われた悲劇の人だ。その右に役行者の石像が立っている。実に素朴である。この日は快晴



◆後鳥羽上皇の歌碑

で清々しい歩きとなった。峠を回り込むように下りると、急に大きな視界が開け、眼下に山村（近露の里）が、さらに遠くの山に社が見える。下りきると、日置川が流れている。この川を渡って再び登ると近露王子がある。空気が澄んでのどかな光景。近露は熊野詣の宿場として開けたところという。王子社の跡には石碑が立っている。その書は大本教団の出口王仁三郎が書いたものだという。見事な筆跡である。迫害されて彼の書はすべて破棄され、唯一残っているものだという。近露の町並みを通り、右に曲がり登って行くと、野長瀬一族の墓が並んでいる。護良親王が元弘の乱に敗れ落ちのびてきたとき、野長瀬一族が追っ手を撃ち、助けた。この時、道の横側から矢を放って敵を撃退したので横矢の姓をもらった。出口王仁三郎も横矢一族という。さらに、古道を行くと道沿いに比曾原王子の石碑が立っている。この辺りは野中というが「一人娘を野中にやるな。いけば水で苦勞

する」と歌われている。しかし、昔から潤れることのない野中の清水はあるし、こういうことかなと思った。野中の人々の生活には明治維新の頃まで縄文時代が色濃く残っていたようだ。木の実を食し、狩りで生活していたらしい。北の人々はきのこを食するがそうした食習慣はなかったようだ。杉林をさらに行くと樹齢千年を越す巨杉に出くわす。十本ほどある。有名な野中の一方杉で、南方向（熊野本宮方向）にのみ太い枝が伸びている。明治の愚鈍な神仏統廃合政策を理由に各王子、古道にあった古樹は伐採されたそうだが、この木も南方熊楠の運動によってかろうじて残ったものだ。杉の前に立つと平安時代にタイムスリップしたかのごとき錯角に陥る。石段を登ると継桜王子社がある。継桜とは楠に桜を継ぎ木したことに由来するらしい。汗ばむような秋の日差しを浴びて木立と尾根を歩く。やがて展望が開け、「とがの木茶屋」がある。萱茸き屋根に柿の香りが漂うのどかな



◆野中の一方杉

光景。茶屋の名物は茶粥。昔の人々はここで遠く深い山々を見ながら一服したのである。茶屋の隣の民家はちょっとした博物館になっている。近在の川でとれた化石が多数陳列されていた。魚の化石が多い。日本が海の底であった名残がこの熊野の山中で見られるのだから大自然の変貌を感じざるを得ない。継桜王子の下に「野中の清水」がある。崖の途中から清水が吹き出している。ズボンをぬらしながらぐいぐい呑んだ。うまい。甘露、甘露。名水百選のひとつ。「とがの木茶屋」のすぐ傍に秀衡桜がある。何代目かでそれほどの古木ではない。秀衡桜のいわれは、滝尻王子においてきた赤子のことになり、桜の木の杖を地面に突きさし、「置いて来た赤子が死ぬのならばこの桜も枯れよう。熊野権現の御加護により、命あれば、桜も枯れまい」と祈った。参詣の帰途、桜の杖は見事に根づき、花を咲かせていた……というものである。小栗伝説と同じく熊野詣のPRなのかも知れ

ないが、興味をそえられる物語ではある。

この日、我々は湯の峰山荘に宿を取った。高台にある窓からは遠い昔の村落が一望でき、川のほとりに小栗判官の病を治した、つぼ湯がある。ここは最も古い温泉のひとつに挙げられている。青く霞んだ山並みに紅の陽が辺りを紫に染め沈んで行く。湯の峰山荘の温泉縁起なるものがあって、かの佐々木小次郎がこの湯に浸かりながら燕返しを考案したという。また、小次郎との恋に破れた、お万が遙か下を流れる湯の谷川に投身自殺したという（お万が淵）。至る所にこのような物語が息づいている所に古道らしさがある。

発心門王子から 熊野本宮へ

翌日も快晴。清々しい自然林の中を歩く。いよいよ本宮大社の入り口とされ、最後のお払いをした重要な五体王子のひとつ発心門王子である。ここからが聖域とされていた。今

では瀟洒な鳥居と社殿があるだけだが、平安時代には大鳥居と壮麗な社殿があつたという。王子社の背後には萱茸家屋が数軒、宿もあつたに相違ない。定家が京都で懇意にしていたという尼僧が営んでいたという南無房宅跡もある。後鳥羽院御幸に同行の際、彼はここに泊まっている。一行は歌を奉じ、樂器を奏で、舞や都の芸能をお披露目したことであろう。

発心門王子から水吞王子^{みずのみ}までは舗装されたなだらかな道である。ポツンポツンと民家が建ち、野辺の花が色鮮やかに咲き乱れている。深紅の花、紫の花、濃紺の花。潤沢な空気の間では花の色も違う。今もって住む人の少ないことが熊野の自然を保っている。果無山脈が時折見える。坂を下りきると水吞王子に出た。水吞王子には天然の湧き水があるが、今は飲めない。巡礼華やかなりし旅人の喉を潤したのであろう。ありがたい水が飲める神域ということの水吞王子。

水吞王子から伏拝王子^{ふしかい}までの豊かに苔むす古道は、昔を髣髴とさせる。ところどころに平安時代の石畳の跡が残っている。熊楠が新種のこけや粘菌を捜し求めて熊野を歩いた姿を想像できる。こけの種類は素人目に見ても数十種類はある。太い木々が密集し「昼なお暗し」の感がある。数本の木に人の名前が書かれた札がくくりつけられていた。自然保護を目指した買木運動の結果である。

森を抜けると、突然視界が広がり、果無山脈を一望できる丘があつた。遠くに折り重なるように幾重にも連なる青い山並みの濃淡は、神秘的ですらある。左手に山並、大きくのどかな空間と空、美しい花々を楽しみながら歩く。そこに一軒家があり、つるべの井戸が昔のまま残されている（菊水の井戸）。井戸を覗くと深さ二十メートルは十分ある。つるべで水を汲み取って手を洗ってみたが、ひんやりと冷たい。この井戸水も今は飲めないが昔の巡礼者にとってはまことにありがたい

命の水であつたに相違ない。

色とりどりの花畑を抜け、山道を越え、頂につくと右手に小高い丘がある。ここが伏拝王子である。いよいよここまで来ると、下方に深いV字型の谷が見える。そこが^{おおゆのはら}大斎原。つまり、熊野本宮大社旧社地である。人々はありがたやと伏し拝んだ。そこから伏拝王子の名が誕生した。絶景である。「晴れやらぬ身に浮雲のたなびきて、月のさはりとなるぞかなしき」和泉式部の歌碑が立っている。難行苦行の結果せつかくここまで辿りついたのに、月経、不浄の身となり本宮に入れないという心境を歌っている。ところが熊野権現様が出でてここでは「女人差別や不浄はない。皆、平等である」とのありがたいお告げ。無事、本宮に参内できたというのである。この和泉式部の言い伝えは一遍上人の聖たちの創作で熊野権現は「女人の不浄をも嫌わない」ということを強調したものと思われる。彼女が本当に詣でしたのかは不明だが、ともあれ

和泉式部の供養塔が立っている。

伏拝を過ぎると、茶畑が広がる。へちま、花の栽培も活発である。豊かだ。再び山道に入る。尾根道を南下すると、吊橋がある。とはいえ、今はコンクリート橋だ。渡ると九鬼関所跡、そして三軒茶屋跡。つまりこの地点は高野山ルートの小辺路と中辺路が出会う所で関所として重きをなした場所なのだ。古道の分岐点に「右こうや十七里、左きみい寺三十一里」と刻まれた、古い標石がひっそりと立っている。すなわち高野山まで十七里（小辺路）、和歌山紀三井寺まで三十一里（中辺路）というわけである。関所跡から本宮に向けて降りる古道には平安・鎌倉時代の石畳の名残があつた。

途中、古道から頂の見晴台に出た。すばらしい眺望である。弁当をほおばりながら眼下に本宮の旧社地を望む。その後方は幾重にも重なり連なる山並がせり上がっている。眼下に旧本宮の紫紺の大鳥居が肉眼では小さく確

◆分岐点の道標



◆石畳の名残り



認できた。この大斎原に完成したばかりの鉄筋コンクリートの大鳥居は高さにおいて日本一という。古道に戻り下っていくと、やがて住宅地域となる。実は明治の大洪水で家を流された人々が転家した住宅という。すぐに、祓戸王子に出る。現在は杉の太木に挟まれた小さな祠があるだけだが、人々はここで最後の身を祓い清め、大斎原の旧本宮に望んだのである。

祓戸から旧本宮までは適切な道のりがあった。しかし、旧本宮が洪水で流されたあと、高度にして百七十メートル上に本宮を移転させたために、祓戸王子跡のすぐ裏手に今の本宮大社がやってきたわけである。

熊野本宮大社

熊野本宮大社は三つの社殿からなっている。向かって左の社殿は西御前、中御前で那智大社の主神、熊野牟須美の神（イザナミノミコト＝仏命 千手観音）、速玉大社の主神、

御子速玉之神（イザナギノミコト＝仏命 薬師如来）を祭っている。中央の社殿が證証殿で主祭神の家津美御子神（スサノオノミコト＝仏命 阿彌陀如来）、右手が若宮殿で天照大神（仏命 十一面観音）を祭っている。権現とは仏が形を代えて日本の神として現れた姿であり、熊野本宮の神は阿彌陀如来が神として形を変えて現れたもの、すなわち熊野本宮は神のおわすところでもある。本殿に祭られているスサノオノミコトは大地に木々を茂らせた木の神、森の神ともいわれ、熊野の自然崇拜に合致している。

熊野本宮のアイデンティティはすべてからく三である。社殿も三つなら注連縄しめなわの垂れ下がりも三つ。有名な八咫鳥やたがらすの足も三本。つまり三という数字が熊野から発しているのだ。八咫鳥といえば、古代ギリシャのアポロン神のシンボルと同じである。紀元前七百年のギリシャ神のシンボルと本宮との、その共通性はどうしたものであろうか、興味をそそられる。当

地での八咫鳥は神武天皇の東征と関係する。すなわち彼が熊野から大和国へ侵攻するとき、深く険しい山越えを三本足の八咫鳥の案内により、無事に大和へと到達できたという故事に由来する。そしてこの八咫鳥こそ熊野権現様の使いであった。

大斎原

本宮の長い階段を下り、町中を突っ切るように行くと、すばらしい田園風景にぶつかる。目の前のこんもりとした森は「峻厳さ」さえ感じさせる。そしてとうとうたる流れの熊野川。豊穣な稲がたなびいている。そこに見上げるような大鳥居が建っている。さきほど古道の山から見た、あの鳥居だ。くぐって両側の古木の森の参道を歩くと靈氣すら感じる。ややあって広々とした原が突然のように広がる。ここにこそ大斎原の旧本宮が在った。その地形は熊野川・音無川の合流点の中州であり、神々の降臨の地に相応しく威厳とのどかさを

兼ね備えている。大斎原には十二の社殿やいくつかの境内摂末社、神楽殿や能舞台などがあり、現在の本宮大社の八倍の規模を誇っていた。難行苦行の果てにこの地に到着し、神殿を目の当たりにした、定家が涙したのもうなずける。

明治二十二年の熊野川の大洪水は水位五十メートルに達したといわれる。その時、神主の一人が高い木に攀じ登り難を逃れた。中世以来こうした大洪水は無かったとのこと、やはり明治以降の森林伐採が原因しているようである。しかし、その雰囲気からして熊野本宮をこの地に再建すべきであったと思った。

大斎原を囲むように目線平行に広大な熊野川がとうとうと流れている。参詣を終えた人々はここから舟に乗り、熊野川を下って熊野速玉神社に詣でたのである。（つづく）



◆大斎原の大鳥居

日本
人
と
梵
鐘
の
音

真野龍海

東京オリンピック

開会式の鐘の音

昭和三十九年（一九六四年）十月十日、戦渦のために、のびのびになっていたオリンピックが、東京で第十八回夏期オリンピックとして開催されました。

日本は、この日のために東海道新幹線の新設の完成、東京では堀を埋め立てたりして、高速道路網の整備等々急ピッチで受け入れ態勢を整えたのでありました。

前夜の雨もからりと晴れて、待ちに待った開会式。快晴の空には、自衛隊の飛行機が飛来、青・黄・黒・緑・赤・それぞれの色で、オリンピックの五つの輪を、鮮やかに描きました。よく考えると、高速のジェット機が五

機、八千メートル、東西七キロの大空に、正確に航跡を描かねばならないだろうに、まさに神業でありました。

会場では、選手団の堂々の入場式です。ここで、全世界の目と耳が集中する。この主催国のテーマは？演出？はと。愚生には、これが楽しみです。開会！とたんに、会場をグォーンという梵鐘^{ほんしやう}が、場内一杯に拡がったのでした。

なるほど、これらは日本の伝統とも言うべき音で、多くの国民は一樣に自国の心を、朝夕、除夜の鐘に思いめぐらしながら、会場に漲る梵鐘の音を聴視したことでしよう。

平成十年（一九九八年）二月七日の、長野オリンピックにも、善光寺の梵鐘が鳴らされたのは記憶に新しい事です。梵鐘の音は日本を表す心とも言えましょう。

山のお寺の 鐘が 鳴る

私の寺は東京は芝の増上寺の山内寺院です。その鐘楼とは指呼の間、三百メートルくらいの近いところでは、

朝は冬六時半、夏六時に暁暗を破って鳴り響きます。

夕方は、港区役所の全港区区伝達用のマイクで、「夕焼け小やけで日が暮れて山のお寺の鐘が鳴る」のメロディーが鳴り響きます。それに合わせて増上寺の鐘が鳴り響きます。その昔、東京湾対岸の木更津まで聞こえたという名鐘の音は人々の心を和ませます。

もともと増上寺と同じ日比谷通りでありながら、2キロ程先の内幸町のカリヨンという

数個のベルの音を組み合わせた鐘楼のは、三十分おきに、「カランコロン カランコロン」と、鳴り響いているのに、行き交うサラリーマンや車の人々は見向きもしません。増上寺のことを、近所では、お山と言っています。山のお寺の鐘というものはいいものです。

定時以外にも法然上人の御忌の大法要等の時にも鳴らされます。

知恩院もそうです。ただ御忌は増上寺は四月初旬、知恩院は下旬です。

私はかつて、学生と共に、台湾の山間にある尼僧寺院に参拝したことがあります。近づく、寺院ではいっせいに太鼓を鳴らし、梵鐘を打って、歓迎の意を表してくれました。二度とない経験で、言いしれぬ有難い歓迎の心を味わったことでした。

鐘鳴らし鼓を打ち迎ふ山の寺

知恩院の大鐘

鐘といえは知恩院の大鐘は、大人数で撞かれる風景が有名です。鐘は、特に大鐘は三次元のこの世界から四次元の世界へまで心を拡がらせてくれるようです。今、目に見える風光だけではなく、音が果てしなくのび拡がっていくのに沿ったように聞く人々の心情も拡がります。

「逝く年来る年」といった言葉を重ねるように、

思いは人それぞれに伸び拡がることでしょう。

さて、知恩院の境内は、円山公園に接していて、少し下がると祇園神社があり、道路を隔てて西、いわゆる祇園の花街へと続きます。

昔は、この花街の人も、よい縁があるようにと、知恩院奥、祖廟の左奥にあるその名も濡髪明神ぬれがみみょうじんという祠にお参りしました。戦後は物騒ということもあるのか途絶えているようです。その彼女達の最短の参詣のコースが、大鐘楼脇を通り、一心院を抜けて行ったようです。「京鹿小娘道成寺」のように乙女は鐘には縁があるようです。

大鐘の広大な音は何もかも包むような大らかな心ができるのではないのでしょうか。

新派『京舞』舞台裏の鐘・木魚の音

この大鐘の音が、北条秀司作の戯曲『京舞』の上演の。いわば隠し味のようになって、舞台進行の陰に、流れてきます。

関心のない人には、聞こえもしないでしょうし、説明があるわけでもないから、気にも留めないことでしよう。

このお芝居『京舞』は、場所は知恩院に程近い祇園。井上愛子が、苦勞の修行の末、井上流の跡目を継いで、四世井上八千代となる相続をめぐるの人間模様が繰り広げられます。四世は、九十一才で、人間国宝となります。今年の九月には、新橋演舞場で上演されるようです。

さて、このあたりの苦勞を凌いで芸道精進が、新派らしい人情味溢れた演出で展開します。

先ず若い時の辛苦耐乏の姿が「お留め」と

いう、いわば練習の時、家元師匠の意に満たないと、返さずに留め置いてお稽古の自習をさせるというものです。舞台は、そのお留めを食らった主人公が、舞の自習をくり返す場面が出てきます。日本髪、着物姿で体育でいう後転をする場面が展開します。私の見たのは、先代は水谷八重子で、「お留め」(居残り練習)を命じられたのは波野久里子でしたが、真にうまく、でんぐり返しを何回となくくり返しやってみせます。

最後は押入に隠してもらって息抜きがありますが、たいへんな演技です。

そうこうして、難儀を越えて芸の修練に勤める姿は、自ずから頭角を現さずにはおきません。

それでも、こういった厳しい修行に弱音を吐きそうな彼女を、近くの円山公園あたりに茶店を出しているおまきが、何くれとなく、陰ながら応援し励ましてくれます。彼女はどんなにか嬉しかったでしょう。

円山公園茶店の場

この茶店の場面の台本では、（知恩院の方から、ひっそりと木魚の音が聞こえている）とあります。おそらく知恩院が背景になっているという演出でありましょう。しかし、木魚は弱い音で遠く、という演出でありましようか、観客の多くは気づかないようです。だが、雰囲気はでていきます。

（女主人のおまきが落ち葉を掃き寄せ燃している。舞台が進行する間、木魚の音時々）時は過ぎて、そろそろ、現家元の跡目が関係者で話題に上ってきました。

とある日のこと、祇園世話役の万亭主人杉浦と現家元春子とが登場。私が観た時は杉浦は大矢市次郎でした。大矢は決して巧みな脇役で定評がありました。

杉浦が春子に、「舞の跡目の事を聞かせて欲しい」と言う。春子は「愛子に決めている、まだ秘密、本人にも言うたらあきまへんで。

逆上せるさかい。」と会話。

おりしも居合わせた、おまきと愛子は聞いてしまふ。はからずも立ち聞きしてしまった二人は、長年の苦勞が報われたと抱き合つて喜び、感涙にむせびます。（知恩院の鐘。——近く）

この場面はハイライト、鐘も近く大きく、としたのでしよう。

さて、愛子に四世井上八千代を襲名させた今は春子の百寿のお祝いに「手打ち」という豪華な演技があります。東京の人が好むと言われます。いわゆる出の衣装という黒紋付き正装の裾を引いて芸妓数十人が、一例となつて、手に手に拍子木を両手に、いっせいに打ちならしつつ、舞台は花道を行進して登場。やがて舞台に左右に展開してお祝いの口上を述べます。勇壮で豪華なものです。

『選択本願念仏集』八百年記念に、これが祝宴の京都ホテルでも演じられ、彼女達が声を揃えて「『選択本願念仏集』八百年」と言ったことは驚きでした。

鐘の裏の舞台と茶園

辰見稲荷の場

ところが、その後時移り、四世八千代は芸術院会員の名誉を得て祝福されます。その祝いの夜、四世が、ある夜、祇園の辰見稲荷の傍を通りかかると、零落したようなおまきを見かける。懐かしさで二人は抱き合って喜びます。雪がしきりに降ってきます。おまきは事情あって、これから、ひっそりと奉公して暮らすというのです。困っているようすに、四世はそれなら、「私を辛いときに励ましてくれたおまきさん、どうか、私の所に来て、いつまでもいっしょに暮らしましょう」と抱擁します。折しも満天の雪が、この二人にぐんぐんと降り注いで、祝福するかのようです。さびた地唄の音色。(幕)

雪に鐘の音というと、地唄舞の一番の名曲

『黒髪』の文句が想起されます。

“……しんとふけたる 鐘の音 ゆうべのゆめの 今朝覚めて ゆかし 懐かしやるせなや 積もるとしらで つもる白雪”

と、雪のしんと積もる中の独り寝のやるせなさは、折しも鐘の音が聞かれて寂しさもつること、と嘆くのであります。

これは井上流の底辺にある能の心にも通じるものがありましょう。能はこの現実の世界から、幽玄の世界へと思いを繋ぎます。能の主人公は、幽玄の世界から、この世、舞台に現れ来たって、種々物語を演じて、終わると、またいずかたともなく幽玄の世界、掲げ幕の彼方へと退場して往きます。

降りしきる雪は、掲げ幕のように視界をさえぎってはいますが、その奥には梵鐘の響きのように見えるはしないけれど、世間の道理、人情とか不滅の真理があることを暗示しているように思われはしないでしょうか。

柿食えば 鐘が鳴る

鐘と言え、一昨年のことです。私どものグループでパリに展覧した時のことが思い出されます。同人の方が「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」という句を書き、その風景画、俳画を描いて出品されていました。

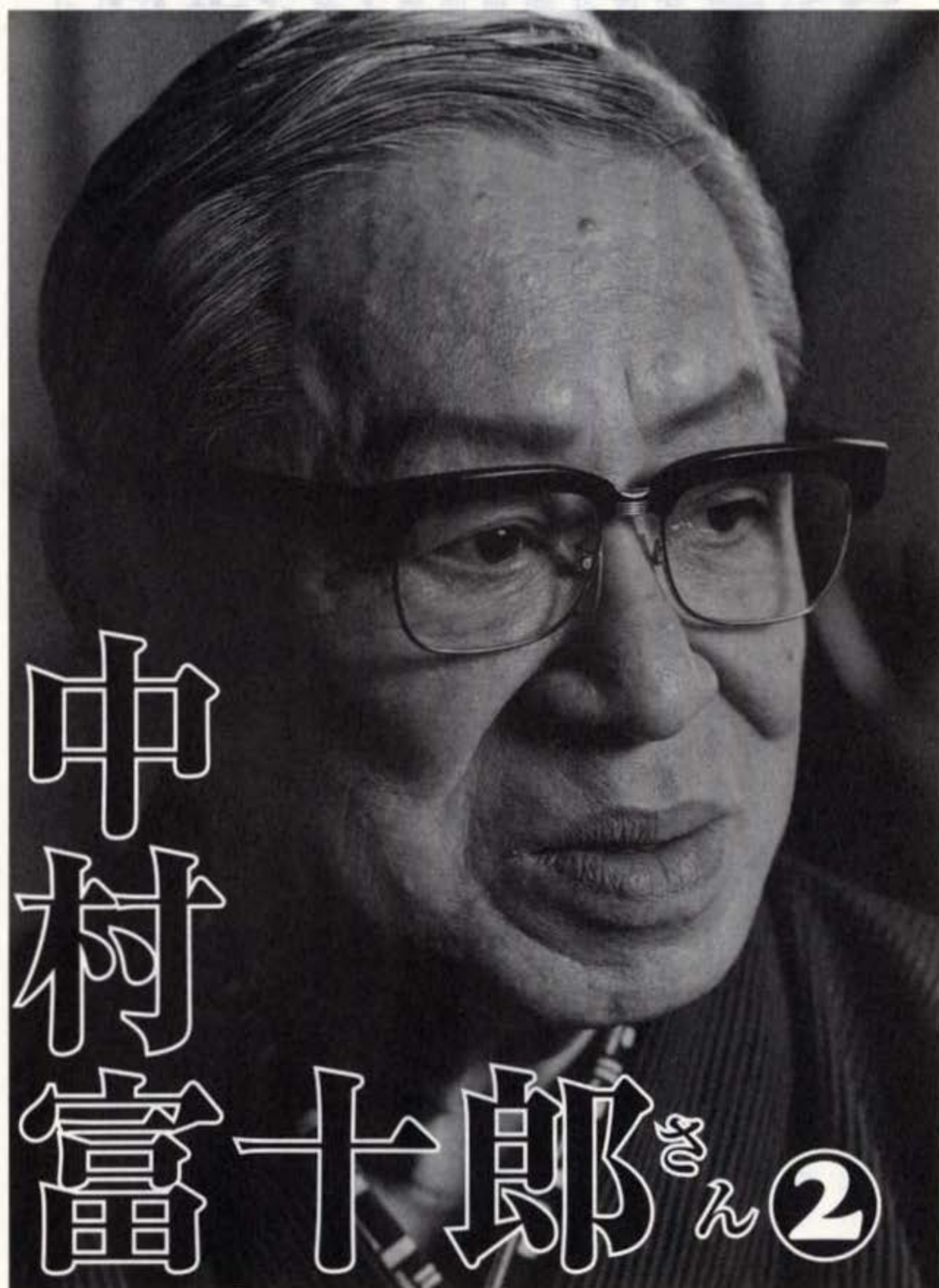
地元来場の方が、これはどういう意味かと質問。作者への敬意を含めての質問であったでしょう。その画は、法隆寺らしき寺院の屋根が木立の向こうに描かれています。

聞かれた私は、先ず、柿という英語が分か

らず絶句しましたが、とにかく果物と訳し、果物を食べていると、近くの有名な最古の寺——法隆寺の鐘が鳴りました。鐘が鳴っている、と、辺り一面、秋の雰囲気——アトモスフェアとなる、と訳しました。その人は果物をたべると何故鐘が鳴るか、という疑問だったのでしよう。句の意のあるところを説明できなくて残念な思いをしました。この場合、やはり、鐘の音が大きな世界、無間の思いの中に人を誘うのではないのでしょうか。今の場合夢幻、幽玄の広がりへ拡がって行くものでしょうか。

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

戦争中、富士郎さんを大きく育てたのが、病気がちになった父先代富士郎の代役で、重い役をたびたびつとめたことだった。

「奈良の映画館で父が『鏡獅子』を踊る初日を前にして過労で倒れましてね。『鏡獅子』は、私は初舞台のとき胡蝶で出てますから、あの名曲は頭にすっかり入ってましたし、振りもよく見て憶えてました。役者はいつ代役が回ってくるかわからないので、日ごろ舞台をよく見ておくことがどんなに大事か、ということもそのとき痛感しましたね。それから、はちよくちよく父の代役で、『鞍馬獅子』の郷の君とか、『心中宵庚申』のお千代とか、『野崎村』のお光とか、すごい役ばかり。おまけに相手が豊田屋さん（三代目阪東寿三郎）とか寿海のおじさまといった大先輩なので、これはいい勉強になりました。こんな大役、ほかにも代りたかった先輩の役者さんがかなりいたと思うんですが、歌舞伎の世界ではその人に倅がある場合、代りは倅にやらせ

るのが第一とされますから、それで相手役のおじさま方も納得なさって、あたたかく指導してくださる。私にとってこれは有難い修業の場になりました」

寿三郎と寿海は「双寿」と並び称された関西歌舞伎の名優で、先代富士郎はその二人の相手をつとめる美しい女方だった。私は戦後一度だけ東京劇場でその富士郎を観たことがあった。岡鬼太郎作『今様薩摩歌』という大正期の芝居で、武骨な薩摩武士源五兵衛が寿三郎、娘おまんが富士郎。豪気一徹の侍が、いかにも上方風で色っぽい娘の魅力に捉われていく過程が面白く、とりわけ印象的だったのが、富士郎の二重瞼の眼許の可愛らしさだった。今の富士郎さんが『道成寺』や『船弁慶』の静を踊るとき、父ゆずりのその眼許でふと先代を思い出すことがある。

「戦後、世の中は一変するし、これからの日本の文化はどうなるのか、もう役者をやめち

やおうか、と思った時期がありました。それを思い止どまったのは、六代目（菊五郎）さんの舞台を見て、ああ、歌舞伎だっ、とつくづく感じたからなんです。『棒しばり』とか『身替座禅』とかもじつによかったですけど、『吉野山』の忠信を見て、清元で踊る忠信とというのはこういうふうに踊るものなのか、と思いましたね。それから『吃又』の又平とか、^{どもまた}『合邦』の合邦とかも、強く引きつけられるものがあつて……なさることはちゃんと歌舞伎でなさってるんですよ。決して現代語で言ってるわけじゃないんですけど、その中に何か現代的な心理描写みたいなの、こっちに訴えかけてくるものがあるんですよ。とつても上等な、お行儀のいい、格調のある歌舞伎役者……なんですよ、すごい役者です。六代目さんが病気で倒れになって、『加賀鳶』の按摩道玄を松碌（二代目）兄さんに代らせて、そのとき、お前うまくやろうと思うなよ、行儀よくやれよ、つておっしゃったそうですけ

どね、これが歌舞伎の根本じゃないでしょうか。行儀がいいというのは、書で言えば楷書で書く、つてことでしょ。うまく見せようとするテクニクよりも、行儀が大事という、六代目さんのこの言葉は、多分九代目團十郎さんの影響じゃないでしょうか」

六代目菊五郎は少年時代、九代目團十郎の元に預けられて厳しい指導を受けた。最初は『子守』ばかり毎日踊らされて、なかなかほかの踊りは教えてもらえなかった、とその伝記にあるが、六代目は『子守』で踊りの基本を徹底的に仕込まれたのだろう。

「九代目さんの教育方針が立派だったんですね。『鏡獅子』にしても『船弁慶』にしても、これは新歌舞伎十八番で市川家のものなんですけど、しかしのちにあれだけの名舞踊として完成させたのは六代目さんですからね。九代目さんという方は、市川家でも尾上家でも、そんなことにはこだわらず、できる者にやらせるといってお考えだった。これがまあ本当の

昭和57年7月の訪米公演での記念写真。
ニューヨーク・メトロポリタン オペラハウスにて。前列右から5人目が富士郎さん



ニューヨークのホテルにて



意味の芸の伝承ということだと思えますよ」
昭和二十四年四月、眼底出血で倒れた六代目菊五郎は、同七月十日、六十四歳で亡くなった。

「私はそのときまたまた父と東劇に出ておりまして、『雷』の女太夫と、猿翁（二代目猿之助）のおじさまの『宮本武蔵』でお通をつとめてました。六代目さんのお宅は新橋演舞場のすぐ近くでしたから、何人かで連れ立ってお悔やみにお伺いすると、どうぞ、と言

われて、死に水をとらせていただいた。御遺骸の唇を割り箸に真綿をつけたもので湿すわけですが、それほどの御縁でもない二十歳の若造がまさかそんなことまでさせていただけるとは思わなかったのでびっくりしました。でも今になって感激しています」

富十郎さんはその後しばらくたってから、二代目松緑との出会いがあり、一時菊五郎劇団に籍を置いた時期がある。

「松緑兄さんに預けられてたころ、話と言えば百パーセント六代目さんのこと。俺なんか鉄砲撃ちのお供をして、親父さんがバーンと鳥を撃ち落とすと、獲物を取りにワーツと駆け出して行く。犬の代りだったんだよ俺は、って（笑）。そんなことまで自慢のタネですよ。あのころ菊五郎劇団に入れて嬉しかったですね。梅幸兄さんはその御子息だし、芝翫さんも六代目さん大崇拜。多賀蔵さんとか八重之助さんといった脇の人も、あなたね、（六代目の）旦那見たらいい勉強になったの

にね、って言うし、番頭さんなんかも、あなたをそばへ出したかったね、って言ってくれたりする。やっぱりすごい人だったんだ、と思いましたね」

名優も六代目菊五郎くらいになると、さまざまな人の心に色濃く影を落としている。

「新派の花柳章太郎さんも六代目さんが好きでしたよ。あるとき『俠艶録』という新派の芝居を、早逝した四代目時蔵君と私がやることになって、指導においでくださったんです。で、それが終わっても、次に松緑兄さんが『暗闇の丑松』を二人に教えてくださるのを、ずっと見ていらつしやいましたよ。六代目さんがよくなさった芝居なんで、なつかしかったからでしょうね。そうそう、『俠艶録』のときに花柳さんが、女の衿足の乱れじ毛（床山の用語で後れ毛のこと）をじっと見つめる、という芝居をしてやってくれよ、と私におっしゃったのをよく憶えています」

話は戻るが戦後間もなく、父富士郎が再婚する。相手は初代鴈治郎の娘の中村芳子で、一時舞台女優としても活躍した人。

「それで、私は父の家を出たほうがいい、ということになって、安宅産業の安宅英一会長の京都のお宅に預けられたんです。これは演劇評論家の武智鉄二先生の御紹介です。安宅会長は巨人・六代目・双葉山が大好き、というお方でしたので、やっぱり六代目さんに心酔していらした武智先生のお口ききということに私を応援してくださることになったんです。七、八年御厄介になりましたかね。運転手つきの車をあてがわれて朝から晩まで踊りだ鳴り物だと稽古場めぐり。もう有難いやら苦しいやらでした（笑）。武智先生は歌舞伎を再検討しようというお考えで、仲のよかった八代目三津五郎のおじさんの協力で幹部俳優の子息を集めると、十分にそのルーツを勉強させようとなさったわけです。歌舞伎の丸本物や松羽目物の演技には能や文楽からどの

ように入ってきたかというお講義に始まって、実際の稽古には非常に時間をかけました。大阪浪花屋の裏の寮に寝泊りして、夜中じゅう夢中で稽古しましたね。文楽の竹本綱大夫（先代）さんとか相三味線の竹沢弥七お師匠さんという一流の方々がおいでになって、義太夫の台詞の息の詰め方、間の取り方を教えてください。くださるんですからじつにぜいたくなものでした」

この関西若手花形による実験劇場の第一回公演は、昭和二十四年十一月に大阪四ツ橋の文楽座で行われた。演目は『熊谷陣屋』と『野崎村』。顔ぶれは富士郎さん（当時鶴之助）、三代目延若（当時延二郎）、のちに映画スターとなる雷蔵（当時延蔵）、三代目鴈治郎（当時扇雀）など。

「私は『熊谷陣屋』の熊谷です。同じ年の夏には『宮本武蔵』のお通だった者が、一転して熊谷なんですから回りの人も私もびっくりですよ（笑）。まず原作を読み直すというこ

とから始まって、たとえば熊谷がやむなく敦盛の首を打ったことを藤の方と妻相模に語って聞かせる物語の件りは、奥にいる鎌倉方の梶原に聞かせる肚で言うのが本当だとか、そういうふうには原作をもう一度よく研究して演じるわけです」

そういう富士郎さんの熊谷を観てみたかったが、なぜかその後一度も熊谷を演じていない。しかし翌年五月の第二回公演でつとめた『勸進帳』の弁慶は、富士郎さん一代の当り役の一つになった。

「このときもやっぱりそのルーツである能の『安宅』を研究することから始めたので、先代の片山九郎右衛門さんに足の運び方から中啓（扇）の持ち方までマンツーマンでいろいろ教えていただきました。『妹背山道行』では今度は私がお三輪、雷蔵君が求女で、これは井上流で踊ったので先代の八千代先生、愛子先生に教えていただきましたし、そうかと思えば『辨天小僧』は菊五郎（五代目）系で

『鳥辺山心中』は左團次（二代目）系で、というふうには、初演をつとめた方の演じ方を大切に研究する、という方針でした。とにかくこの歌舞伎再検討の実験劇場、のちには花形歌舞伎公演となるんですが、そのおかげでいぶんいろんな役に挑戦しましたし、多くの先生方の御指導もいただきました」

この公演は昭和二十七年八月、十三回で一応の終止符を打つ。

二代目松祿との出会いはそのあとだった。『菊五郎劇団が『群盗南蛮船』という映画の撮影で京都に来ていたときに、安宅会長が頼んでくださった私の舞踊会のために松祿兄さんが『うかれ坊主』を教えに来てくださったんです。六代目さん直伝の踊りを基本から叩き込んでいただいた感じで、有難かったですね」

この『うかれ坊主』も、またのちに当り役となったところがすごい。（つづく）

陽たまりの街

絵と文

村上健

モツ焼きの串を片手にコップ酒をあおる人。片膝立てながら将棋盤とにらめっこする人。開演までだいぶ間がある大衆演芸場前にたむろする人。ピンク映画の看板をじっくり吟味する人。こんな人でいっぱいなのが、大阪は天王寺の通天閣界限です。

しかもこれが平日の朝十時！ グローバル化やらIT化とやらで、やたらハイペースになっている当節、うらやましいほどマイペースな人びとであります。

阪神タイガースの編柄のテントで「ライオン堂」は面白いなあと、スケッチを始めたたん、次々にマイペース族がのぞきにやってきます。

「うまいもんやなあ兄ちゃん。……それ描いてなんぼ儲かんの？」

こんな飾り気のない質問は、後にも先にもこの街が初めてでした。

何ゾ余行ヲ棄テテ、タダ念仏ト云フヤ。答ヘテ曰ク、コレニ二三ノ意アリ。一二ハ諸行を廃シテ念仏ニ帰セシメムガタメニ、シカモ諸行ヲ説ク。二ニハ念仏ヲ助成セムガタメニ、シカモ諸行ヲ説ク。三ツニハ念仏ト諸行ノ二門ニ約シテ、オノオノ三品ヲ立テムガタメニ、シカモ諸行ヲ説ク。

【選択集・第四章】

なぜ釈尊は、余行を捨ててただ念仏だけを勧めるのであろうか。

これには三つの意味がある。一つには、諸行を廃し、念仏一行を専修せしめるためにあえてこれを説かれたのである。二つには、称名念仏一行の励み、助けとなるための手段の意味において説かれたのである。三つには、称名念仏こそが釈尊のみこころであり、傍らにおくべき行であることを示すために説かれたのである。（趣意）

夕陽に抱く明日への憧憬

夏に向けて日が延びていくのはありがたく、またうれしい。職場からの帰り道、明るいほうが寂しくないし、それよりも、夕陽が見られる機会が増えるからだ。都心だと、高架を走る電車からでも、ビルが障壁となつてたまにその谷間からのぞけるにすぎないが、郊外へ進むにつれ、西の空を茜色あかねに染め、名残惜しそうに山の端はに姿を隠しゆく夕陽を見ることが出来る。緊張していた心身がほぐされてゆくようで、ここちよい。

人は古来、洋の東西を問わず、朝、夕というグラデーションのかかった時間帯に特別な思いを抱いてきたようである。朝を生命のはじまりに、夕を終焉になぞらえることなど、よくある考え方だ。古の人々は、この両者にどんな思いを持ったのだろうか。きっと朝には、何が潜んでいるかも知れない暗闇の世界と別れられた安堵感と、「今日」への期待感を抱いたであろう。夕暮れには、「今日」一日が過ぎてしまったことにホッとしながら感謝の念を捧げたであろう。同時に、まもなく迫り来る夜への恐怖感に襲われることもあったかもしれない。「始」と「終」とのサイクルを、体と心が自然に受け止めていたのではないか。ただきつと、夕はたんに「終」にとどまらない。どこかに、「また明日」「明

日本酒のことば

の日本酒

じかん

その八

熟成酒

古酒

ブレンド酒

一晩で満開となった桜も散りきり、ヤマブキやエニシダが咲き揃った、さる日曜の昼下がり。とあるご縁により、とても珍しい「日本酒の会」に参加する機会をいただきました。主宰は、東京・白金の焼き鳥屋さんT。ご主人であるIさんは、「飲むときは小一時間で軽く一升は（笑）」という文字通りの日本酒党で、なおかつ、随分前から「熟成酒」に注目されてきた方です。というわけで、この日の「日本酒の会」も、菊姫・菊理媛（石川県・平成七年仕込み）、菊姫・黒吟（平成六年）、手取川・大吟醸（石川県・平成七年、九年、十一年）などなど、滅多にお目にかかれない、珍しい熟成酒の

数々が味わえるものでありました。

ところで、その熟成酒ですが、手間暇がかかるゆえに高価であるということもあり、私自身は、この機会を得るまではほとんど知りませんでした。でも、とくに最近、酒蔵を訪ねると、「熟成酒も試みている」というお話をうかがうことが増え、「熟成酒って？」とは思っていたのでした。関連資料などを調べてみると、熟成酒（古酒、秘蔵酒などとも呼ばれる）に共通していえることは、何年も、ときには何十年も寝かす（熟成させる）ことによって、一夏寝かせた「ひやおろし」のまろやかさともまた違う、とろりと深い余韻のある味わい、芳醇な香りになっ



藤原理加

取材協力 白金 西玉（東京・白金）
和酒専門店 さかや栗原（東京都・町田）

ていること。実際、この日いただいた熟成酒には、ブランデーや紹興酒やシェリー酒などと比較したくなるようなものさえありました。そして、それは、合わせる料理も含めて、たぶん、日本酒の新たな方向や可能性を見出させてくれるものでもあるのです。

この日、やはり「日本酒の会」に参加されていた、K酒販店の女主人・Kさんのお話が印象的でした。彼女は、富山県の四つの酒蔵の熟成酒を独自にブレンドさせた「艶・伊津子ブレンド」という、熟成酒入門者にもぴったりの、リーズナブルでおいしい画期的なブレンド酒をプロデュースした方。その方が、「日本酒

はつくる側も飲む側ももつといろいろ遊んでいいと思います。熟成酒のブレンド酒の試みも、その一環なんですよ」というようなことをおっしゃっていて、まさにハッとさせられたのでした。

それにしても、この日の客人たちの（Tの常連というアメリカ人男性も含め）、一様に、ニコニコと幸せそうな顔。この日供された十数種類のお酒を合わせると、一人軽く五合は飲んでいるはずなのに……。きつと、いいお酒は酔い心地もいいのだなあと推測しつつ、私ももちろん他の方々に倣い、チェイサー代わりのビールを頼み、貴重なお酒を一滴も残すまいと、さらに楽しく飲み続けたわけでした。

夫婦とも老いて益々健康であり、温泉旅行など楽しんでおられる夫人に、

「お羨ましい……」と言ったら

「皆様からもよく言われます。先月は台湾へ行きました。楽しい旅行でした。ご主人に先立たれ淋しい思いをされている方々のことを考えますと、勿体ないくらい幸せだと感謝しています。」

しかし、主人と別れる日がいずれは来るんだと考え出しますと、悶々として眠れなくなります。

この頃はその思いが昂じまして、楽しい筈の宿の夕食にも食欲が進まず、どうしたんだ、と主人に心配をかけることが度々ございます」という憂いの言葉が返ってきた。

私は阿弥陀経を開き「俱会一处」の経文を示してこれを説き、さらに法然上人

が御流罪の時、涙するお弟子に示されたお言葉

『会者定離は常のならい、今はじめたるに非ず。何ぞ深く歎かんや……。浄土の再会はなはだ近きにあり。今の別れはしはしの悲しみ、春の夜の夢の如し……。たとい師弟おなじ都に住すとも娑婆の離別ちかきにあるべし。たとい山海をへだつとも。浄土の再会なんぞ疑わん』を伝えたうえで

「阿弥陀様は必ずご主人とお浄土で再会させて下さいます。別れは一時の事。喜びが待っています。これを深く信じてお念仏に励み、悶々の暗雲を吹き飛ばして下さい」

と話し、二人でご本尊にお十念を捧げた。

浄土会

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●境

〔特選〕越境の筍土を競り上げぬ

井村善也

筍の勢いはとても強く、放っておくと根が
どンドン広がってしまう。この筍もそれで、
隣の林に越境したのだ。この頃里山が放置か
れて、竹林の横暴が全国的に問題になってき
ている。はからずも時事句になった。

〔佳作〕境内の石仏あまた牡丹の芽

金谷 友江

春浅き境内へ入る御練りかな

多摩和田仁

寒林に打ち込む響き境界杭

石原 新

●菜

〔特選〕菜を洗う尼の指先風光る

河合富美枝

小流れに洗っているとすると、外のどこ
かの蛇口とするのも、読者に任されている。
白い指先が印象的である。「尼」にやや作意

〈特選〉

鳥帰る野に熟睡の甕の色

片桐てい女

●自由題

が見られるが、兼題によるものだから、どう
しても絵そらごとになるのだろう。

〈佳作〉

好きな人われにもひとり花菜漬け

内藤 隼人

膝つきし土手のぬくもり嫁菜つむ

山口 信子

ステーキに山菜添えし山の宿

増田 信子

畑にはどこでも、下肥を溜めておく甕があ
った。今は使われることもなく、残っている
のも珍しい。「熟睡」は多分そういう古いの
を指すのだろう。鳴き合い飛び交っていた鳥
も、北に帰る頃である。

〈佳作〉

肩車されて桜に近づきぬ

柏木 貞華

採石の傷深き島春浅し

西井 正

餌を隠す犬のしぐさや春の土

北川 弘子



編集部選

参加作品

境

県境の緑のトンネル越せば京

山本美代子

境内は掃き清められ蓮如の忌

佐藤 雅子

摩耶六甲境界隠す花曇り

中島 一子

春きざす海の上なる潮境

片桐てい女

境界と知りて筍雨に伸ぶ

中島富士子

田の境真直ぐ帰るや落雲雀

大場 清

境界線示す遺愛の桜かな

周東 澄江

花に来て無我の境地となるしじま

河合富美枝

春暁の後光さしたる境かな

今井 恵子

花冷えや鈍行町の境越ゆ

谷 しげ子

菜

日の暮に菜の花明り道端に

今井 恵子

ふる里の菜の花畠の歌恋し

山本美代子

浄土へと急ぎし畑菜種梅雨

佐藤 雅子

手土産の老舗のかほり京菜買ふ

大場 清

一族の墓に菜の花沈丁花

中島 一子

一畝の菜の花朝の顔揃ふ

周東 澄江

菜種梅雨洗濯ばさみに齟齬生ず

片桐てい女

二三日留守の畠の菜の呆け

金谷 友江

菜の花の一段と濃し今朝の雨

谷 しげ子

お浸しの菊菜の固き蕾かな

伊藤寿美子

自由題

風光るここちよき日のお練りかな 今井 恵子

山里の雪日々に解け芽吹くとき 安達 良昭

永き日の甘酒茶屋に客一人 河合富美枝

緋の絨緞掃くには惜しきちり椿 山本美代子

野火走る捨て来しものを思ひけり 中島富士子

雪解けの土に還してほとけかな 佐藤 雅子

ささやかな花の宴に老い唄う 中島 一子

魅けて開花都心の六義園 周東 澄江

曳船の進むともなき日永かな 寺下 忠至

春潮に揉まれし目鼻石ぼとけ 蘭田 郁子

草摘みの園児固まる川向こう 浜口 佳春

座すに良き石の影なる草萌ゆる 池田 伊吹

芽柳や語尾ひびきあう京言葉 三輪 正道

炉を塞ぎ部屋の広さに坐しにけり 金谷 友江

浄土誌上句会のお知らせ

題

⑤季語ではありません

雲

自由題

締切・二〇〇五年五月二十日

発表・『浄土』二〇〇五年七月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんね

20 かい目

かまちのしろう



編集後記

手枕で友が贈りし新茶飲む 岱潤

四月号に芥川賞作家の玄侑宗久氏の「唯心の浄土・猫の浄土」という一文を掲載しました。氏はご存じの通り臨済宗の僧侶で、文の内容もまさに臨済宗に於ける浄土観の「唯心の浄土、己身の弥陀」のお話でした。

その一文に対し何人かの読者の方から、法然上人鑽仰会としてこのような浄土宗と異なる浄土観を、何の注釈も入れずに掲載するのはおかしいのではないかというご指摘を受けました。

至極ありがたいご指摘で、真剣に本誌「浄土」をお読み頂いている読者の多いことに、嬉しく感激した次第です。

この己身の弥陀・唯心の浄土という禅宗の浄土観は、浄土宗の浄土観から

すれば対極にある考え方と云っていいかもしれません。お浄土は往生するところの西方極楽浄土という私たちの信仰に対し、禅宗では阿弥陀さまもお浄土も私たちの心の中にのみ存在し、死後世界としての浄土を想定しないと考えているようです。こうした禅宗の考え方を第七祖の聖阿闍梨上人をはじめ、多くの先達の上人達が鋭く批判しております。

先日私も曹洞宗の上人とお話をしておりまして、葬儀の意味や死後どうなるかという質問に対し、浄土宗で良かったということをつくづく感じたことがございました。様々な宗派の異なった浄土観を学ぶことは、自己を学ぶことに通じると思っております。(長)

次号、七・八月合併号は
八月一日の発行となります。

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

編集顧問

大室了皓

雑誌「浄土」
特別会員、維持会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山・清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村真道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

浄土 七十一巻六月号 頒価六百円 年会費六千円	
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可	印刷
平成十七年 五月二十日	発行
平成十七年 六月一日	発行
発行人	真野龍海
編集人	佐藤良純
印刷所	株式会社 シーティーイー
〒一〇五・〇〇一一	
東京都港区芝公園四・七・四明照会館内	
発行所	法然上人鑽仰会
電話	〇三(三五七八)六九四七
FAX	〇三(三五七八)七〇三六
振替	〇〇一八〇・八・八二八七



平成10年9月号



平成10年10月号



平成10年11月号



平成10年12月号



平成11年1月号



平成11年2月号



平成11年3月号



平成11年4月号



平成11年5月号



平成11年6月号



平成11年7・8月号



平成11年9月号



平成11年10月号



平成11年11月号



平成11年12月号



平成12年1月号

法然上人鑽仰会の

本



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円



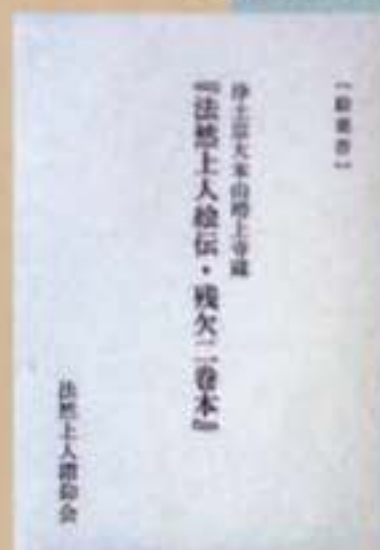
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブツダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036